

朝鮮・奇巖法堅禪師の念佛禪について

韓 普 光 (泰植)

1. はじめに——奇巖法堅の生涯と行績——

朝鮮中期は壬辰倭亂のために國家が風前燈火の危機となり、佛教は崇儒抑佛政策によって佛教の法難時代であった。このとき國家と佛教のために献身した人が清虛休靜であり、彼の弟子の中のひとりが奇巖法堅（1552-1634）である。彼の生涯と行績に関する基本的な資料は李敏求の「高城 楡岾寺 奇巖堂 法堅大師 碑文」¹⁾（以下碑文と略稱）と『奇巖集』3 卷²⁾がある。この論文では『奇巖集』と「碑文」を中心として研究したい。

先ず、「碑文」によれば、彼の故郷は全羅南道扶安である。父は金億世であり、母は李氏である。明宗 7 年 1552 年に生まれた。彼の法名は法堅であり、法號は奇巖である。12 歳に性寬を恩師として出家し、14 歳に雷默の門下で内外典を勉強した。そして、三藏に精通し、外典である子史も學習した。

彼は雷默處英の門下で佛經と儒書など内外典を學習したあと捨教入禪の道を選んだ。「碑文」によれば、彼は佛教經典のみならず、儒書と歴史書まで學んで博學多識で、詩文にも能熟した。しかし、そのようなものは名利を高め、知識を誇るものであり、生死問題を解決する道ではない。そして、彼は捨教入禪の道を選択した。當時、佛教界の善知識である清虛休靜を訪ねた。

清虛が禪宗について質問した時に彼は偈頌をもって答えた。この詩は「答西山問禪宗韻」（韓仏全 8, 163a）である。

單刀橫把跨天際 斬盡前來佛也僧 霜刃指山崖欲烈 寒光當處冷冰冰
聲前有喝聞千里 句後無言透萬層 箇裡商量無受授 何人傳得古燃燈

この偈頌を吟味すれば、「般若智慧の刀を持って悟りの道に至る。その前は佛も祖師もなし。器世間までも自由自在に戲弄する。名と相が斷絶する言語道斷の境地であるのになぜ法を傳受することができるのでしょうか？ ただ覺者のみ分る」として、自身の頓悟の世界を見せた。この偈頌を見た清虛はすぐ印可して嗣法弟

子とした。そのあと四溟堂松雲と交流して一生の道伴としていった。

彼の學文と禪旨は廣く知られたので、數多くの人びとが教えを受けるために雲集した。柳夢寅の「留別天德庵法師法堅序」³⁾によれば、これは彼の學問と修行の深度について述べている。彼は教學と禪旨のみならず、儒書と歴史書にまで能通した。奇巖は1592年壬辰倭亂以前まで智異山で修行したと思われる。したがって、40歳以前には湖南地域の智異山の周邊で修行精進し、後學を指導したと思う。

しかし、彼が41歳であった1592年には壬辰倭亂の戦争が起こり、僧兵將として活躍した。彼は江華島に配置され、その島を守るために「壬辰年江華府鑄銃筒及彈子勸善文」(174a)を作って銃筒と兵器を造る募金活動を展開した。

その後1594年43歳の時に長城縣監である默齋李貴の推薦によって湖南地域の戰略要衝地である笠巖山城の築造監督として都摠攝になった。

彼は戦亂後には妙香山と九月山及び金剛山で修行した。ところで、いつごろ彼が金剛山に入ったかについてはよく分らないが、おそらく50歳ころであろう。李植の『澤堂集』⁴⁾によれば、李植は1632年に81歳の奇巖と金剛山の白蓮庵で出會った。そのとき奇巖は次のように言った。「この山に住すること30年となり、また、この谷間を抜け出ないこと20年ころになる。今年私の年は81歳である」というので1602年に金剛山に入ったと思われる。

58歳(1609)の春には洪水で崩壊した金剛山の百川橋を再建立した⁵⁾。また、そのあとも金剛山楡岾寺の塔も重修し、樂西庵と船岩庵と萬廻庵なども重修した。このように彼は金剛山を愛し、金剛山の多數の寺院を重修再建した。なお、金剛山の美しさについて詩歌を吟じた。また、金剛山を訪ねる士大夫などと儒佛の同異について討論もした。

83歳であった1634(甲戌)年9月に大衆たちに涅槃することを知らせる臨終偈を詠じたあと端坐して入寂した。彼の舍利を收拾して楡岾寺の西麓に浮屠と「奇巖堂 法堅大師碑」を建立した。

彼は佛門では惟政、彦機、雙伋、應祥などと交分が深く、世俗人では李敏求、柳夢寅、李植、李貴、鄭曄、趙纘韓、申翊聖など儒學者あるいは官僚、文士との交流も多かった。彼は金剛山で後進を指導しながら念佛と坐禪修行と兼修した。

2. 奇巖法堅の他方淨土觀

奇巖法堅は清虛休靜の嗣法弟子として臨濟の看話禪法を傳受したが、本論文では彼の禪思想と文學的な面より他方淨土信仰と念佛修行について述べたい。この

(16)

朝鮮・奇巖法堅禪師の念佛禪について（韓）

ような資料は少ないが、彼の念佛偈頌は今日韓国佛教に果した影響が大きかったので論じる必要がある。したがって、彼の浄土關聯資料を分析して他方浄土的な面と唯心浄土的な側面を分析する、

まず、他方浄土的な面では指方立相的な西方極樂浄土と稱名念佛及び極樂往生のために行う遷度追善供養について糾明しよう。そのあと、唯心浄土觀について述べたい。

2. 1. 稱名念佛の勧め

①一つ目に彼の浄土觀を代表する「念佛觀」について述べたい。この偈頌によれば、彼は稱名念佛を勧めている念佛修行者である。この偈頌は今日まで韓国佛教に大きな影響を果し、佛教儀式に廣く愛誦され、お寺の柱聯板にも多數彫刻されている。これは偈頌の題目のように彼の念佛觀について具體的に表現している。即ち彼の浄土觀であり、念佛修行觀である。したがって、題目を「念佛觀」（韓仏全 8, 161a）とつけたいと思う。

極樂堂前満月容 玉毫金相照虚空 若能一念稱名號 頃刻圓成無量功

この偈頌は満月の夜に極樂殿の前で詩を作ったのだろう。その満月は佛さまの眉間白毫の光明のように天地虚空を照らす風景である。本當に月光が明るい静かな夜である。そこに正坐して南無阿彌陀佛を稱する念佛行者の至誠心を感じる。ひたすらに一念で南無阿彌陀佛のみ稱じる瞬間に無量な功德を受けることができる。この詩では奇巖がみずから極樂殿で稱名念佛する姿がそのまま現われている。

起句では満月の夜の寂寂な浄土道場のお寺の雰圍氣を感じる。承句では道場に月光が充滿することが現われている。轉句では熱心に稱名念佛している念佛行者の姿が見え、また稱名念佛を勧めている。結句では阿彌陀佛の無量な本願力の功德と加被力を感じることができる。

ここでいう一念とは一心であり、ひたすらに阿彌陀佛のみを稱する念佛三昧を意味している。深く念佛三昧に入って阿彌陀佛の名號を稱することだけでもその功德は無量である。このようにできたら結句では頃刻即ち刹羅間に無量な功德が成就できる。

奇巖の「念佛觀」は今日の韓国佛教に大きな影響を果して、いままで朝夕禮佛と鐘聲にも念誦し、亡者の遷度のために追善供養する時も莊嚴念佛として愛誦されている⁶⁾。しかし、現在愛誦されている偈頌では承句の「玉毫金相照虚空」の中に「金相」から「金色」に變わり、また、轉句の「若能一念稱名號」の中に「若能」から「若人」と變わっている。その變化の理由などについては分からないが、

意味はあまり変わらない。

②二つ目に、奇巖の稱名念佛に関する偈頌は「賽復眞求語」(161b)である。これはおそらく復眞という僧侶が天上に誕生する方法と地獄に行くことについて質問し、正しい修行方法を問議したと思われる。これについて答えた偈頌である。

生天入地不由他 我若無心佛亦何 端坐收情稱聖號 不曾移步見彌陀

この短文の偈頌には稱名念佛する心と身の姿勢及び念佛の方法まで説いている。先ず、心がけは天上とか地獄に關する種種の分別心を捨て、無心の境地に入ることを強調している。次に身體の姿は正坐することを言うのである。即ち、結跏趺坐あるいは半跏趺坐を意味している。これは四種三昧の中に常坐三昧を強調している。その後、心を靜かにしてひたすらに南無阿彌陀佛のみ稱じることを説いている。そうなれば、阿彌陀佛は念佛行者の目前に姿を現わすので見佛することができる。したがって、奇巖は朝鮮時代の一般的な禪師達とは異なり、積極的に稱名念佛を勧め、阿彌陀佛を親見する見佛三昧法も教えた。

③三つ目に、稱名念佛については「長興寺彌陀像改金靈山會幀西方九品會幀重修勸善記」(韓仏全 8, 177c) にも現れている。

況此妙像神畫 不知出於何人 斯燕石一塊 雕三十二相之彌陀齊紈數幅 掃西方九品之嘉會
靈山一會 亦出其手 影像相對 如鏡照鏡 重重祥雲 密布玄關 巍巍金面 皎若圓月 明無不燭
德無不被 見色聞聲 過化存神故 一聲其號 徑超浩却之功 片時觀像 已躋蓮華之域

この勸善記は長興寺の阿彌陀佛像の改金と靈山會上幀畫及び九品往生圖を重修するために作ったものである。まず、佛像と佛畫の造成緣由について説明し、つづいておのおの尊像について具體的に説明している。これによれば、阿彌陀佛像が石佛である。佛像を改金し、靈山會上圖を描き、九品往生圖を重修してその前で禮拜して供養しながら念佛することを述べている。特に阿彌陀佛像の前で稱名念佛することを説く、一聲だけ念佛してもその功德は無量であり、數億劫の罪を消滅することができるという。また、九品往生圖を見て觀佛すれば、すぐ蓮華生して極樂世界に往生することができるという。このような教えは稱名念佛と觀念念佛の重要性を強調していると思われる。

④四つ目に稱名念佛法について説明しているものに「金剛山樂西庵重創記」(韓仏全 8, 183b) がある。

若能於此 念彼樂方 孜孜不息 則樂方即此庵 此庵即樂方 若不然者 心猿擾擾 意馬喧喧 坐馳異類

この重創記は淨土道場である金剛山の樂西庵を重創する時に作ったものであ

(18) 朝鮮・奇巖法堅禪師の念佛禪について (韓)

る。この寺は慧能大師によって1568年に金剛山に創建された。その後、堂宇が衰落したものを雪梅長老によって1611年に重創が始まり、1613年に完工する時に奇巖に重創記を頼んだものである。ここでは樂西について説明し、淨土道場であることと明らかにしている。つづいてこの樂西庵で修行する人の心がけを詳しく説きながら念佛者と參禪者及び教學者にまで言及している。

「この淨土道場である樂西庵で正坐して南無阿彌陀佛を稱名念佛すれば、ここがすぐ極樂であり、極樂がすぐここである。しかし、このよい極樂道場で心を休めなくて念佛しなければ、いくら念佛しても心は常にそとに向ってよく走る」という。

これはさきの「念佛觀」と一脈相通して一心不亂に稱名念佛することを強調している。また、彼は稱名念佛を勧めているが、彼の内面の世界には自性彌陀唯心淨土の念佛禪的な面も共有している。

2.2. 極樂往生の發願

彼の豫修疏と多數の疏には祖上の遷度と極樂往生を祈願する文章が見える。これを分析して彼の他方淨土の往生觀について考察したい。

①彼は生前豫修齋を舉行しながら「生前豫修疏」を作った。韓國佛教では陰曆で4年に一回ある閏年に生前豫修齋を行う。これは豫修、逆修、自修、追福、追善という。彼の「生前豫修疏」⁷⁾によれば、もし、豫修行者が生前の業報によって地獄に行っても生存時に豫修齋の功德として地獄の果報を除き、また、たとえ善業と念佛功德がなく極樂世界に往生することができないものでも豫修齋の功德が往生の正因になることを願う。即ち、生前豫修齋の功德が極樂往生の正因になることを發願している。

②また、多數の疏にも極樂往生を願っている。その中に「金剛山船岩萬廻二庵重修落成疏」と「船岩重修落成疏」には施主者の先祖と一般靈駕の往生を發願している。先ず、「金剛山船岩萬廻二庵重修落成疏」では、以下のようにある。

亦願各各記付先亡祖考列名靈駕 仗此勝緣斷諸塵垢 永別此岸 常遊樂邦云云⁸⁾

この發願文では佛事と同參佛子の先祖と因縁ある佛子などの極樂往生を祈る。そして、彼は他方の極樂淨土の存在についてはっきり認めてそこに往生することを願っている。次に同じ船岩庵の重修記である「船岩重修落成疏」にも「願わくは、靈駕達が永い苦海を脱けて極樂世界に往生させよう。」(韓仏全8, 169b)と發願している。したがって、これは特定の靈駕より不特定多數の一般的な無主有主孤魂を対象としている。

また、長安寺の達磨像の造成と經典の印出のあとに作った「金剛山長安寺造成達摩印出諸經慶讃疏」（韓仏全 8, 170c）にも亡者の往生を願っている。

亦願各各記付列名靈駕 親彌陀玉毫光 卽生淨土 聞靈山微妙說却脫塵軀 隨彼自在之身降此閻浮之地 如有未斷之結 更作再世之緣

これは靈駕が阿彌陀佛の眉間白毫光明を親見して極樂世界に往生することを發願している。そして往生して阿彌陀佛の說法を聞き、解脫して、成佛することを祈願する。なお、極樂世界で成佛しても極樂世界に住まず、また娑婆世界にもどって衆生救済することを願っている。

このような各疏の特徴を分析すれば、一つ目には同參者のための祈願である。佛事の同參者のための祝願と先祖と本人の極樂往生を祈願している。また王室の布施がある場合は王室の安慰と先王達の極樂往生を發願している。二つ目には金剛山にある寺刹が大部分である。彼は 30 餘年間金剛山に住みながら各種の佛事を主管し、また佛事の疏を作った。三つ目には彼の往生發願は臨終する時に阿彌陀佛を親見して來迎接人することを強調している。また、白毫光明の阿彌陀佛と七寶蓮臺に往生することを説いている。したがって彼の淨土信仰は『阿彌陀經』を中心としている。

③彼は父母の極樂往生のために 49 齋を行う。これについては「薦父疏」と「薦母疏」がある。先ず「薦父疏」（韓仏全 8, 172b）では、以下のように述べられる。

仰惟白毫 俯鑑丹懇 雖微齋體 可憫虔誠 憐孤子罔極之懷 授先考安養之樂 伏願靈駕 蒙佛提接聞法勝緣 乘彼白雲 至上帝之階下脫此幽壤 就樂土之光中

阿彌陀佛より眉間の白毫光明を發して靈駕を極樂世界に迎接することを願っている。彼は父親の 49 齋の時に『法華經』を読み、魚山として念佛作法を行ったという。特に白雲に乗って天上に至って極樂までいくことを祈っている。

したがって、彼は亡くなった父母のために 49 齋を舉行しながら父母の極樂往生を懇切に祈願している。この疏によって彼の深い孝心と懇切な極樂往生を願う心を感じることができる。彼は確かに他方淨土極樂世界の存在を信じて阿彌陀佛の本願力を確信している。

3. 奇巖法堅の唯心淨土觀

朝鮮時代のほとんどの禪師たちは修行的には禪と教を兼修しながら信仰的には淨土に回向している。また淨土信仰も修行の一面として収用し、稱名念佛も唯心的に理解して念佛禪に歸結されている。奇巖法堅も例外ではない。彼は稱名念佛

(20)

朝鮮・奇巖法堅禪師の念佛禪について（韓）

と極樂往生の他力信仰を深く信じながら、一方で淨土念佛を唯心的に理解している。

①先に述べたように「念佛觀」にも稱名念佛を主唱しているが、全體的な雰囲気は自性彌陀唯心淨土であることを感じる。ここで「若能一念稱名號」すれば「頃刻圓成無量功」ということは一念の念佛である。一念は一心であり、唯心であると思われる。したがって、その意味は自性彌陀唯心淨土の念佛禪的な修行法である。そして韓國佛教には奇巖の「念佛觀」の偈頌を莊嚴念佛の中でも唯心淨土の念佛禪と分類している⁹⁾。

②また、唯心淨土的な表現があるのは「酬李白業求語」である。この偈頌は李白業より念佛修行法について質問を請けたようである。

性不死生無量壽 心中惻隱是觀音
時時二聖如相對 佛國何須別處尋¹⁰⁾

無量壽佛は生死を超える時に可能であり、觀世音菩薩は大慈大悲の惻隱心がある。即ち、無量壽佛は西方淨土極樂世界になく、自性にあり、觀世音菩薩は慈悲心の實踐が觀音行であると説いている。無量壽佛と觀世音菩薩は探さなくとも、ただ、心中にある。

③彼が自性彌陀という言葉を直接使ったのは「松雲大師百齋疏」である。彼は四溟大師の百齋を迎えて2遍の「百齋疏」を造った。その中に後篇で自性彌陀と言及している。

伏願先師覺靈 仗此勝緣 蒙諸佛之授記 聞彼妙法 見自性之彌陀¹¹⁾

「願わくは、禪師の覺靈は殊勝な因縁に依支して諸佛より授記を蒙りて、微妙な法を聞いて自性の彌陀を見てください。」即ち、四溟大師の覺靈が佛様より授記を受け、法門を聞いて自性彌陀を親見することを祈願している。彼が四溟堂に自性彌陀を勧めたことは自らもこのような念佛禪を修行していたように見られる。

4. むすび

以上のように奇巖法堅は扶安で生まれて、12歳のときに性寛を恩師として出家した。14歳のときに雷黙の門下となり學問を學んで經典と儒書及び歴史書まで勉強して博學多識で、詩文章にも優れ、數多い詩文章を残している。坐禪修行して休靜より悟道の印可を受けて嗣法弟子になった。壬辰倭亂には江華島で義僧軍として參戦し、また、長城の笠巖山城の築城には都摠攝に任命された。若い時は智異山で修行したが、51歳以後は30餘年間に金剛山で修行精進した。彼は金

剛山に廢墟された寺院の復元と重建をしながら勸善文を作って化主もした。彼は誰より金剛山を愛し、その美しい景致を讃嘆した。

彼の詩文は『奇巖集』に収録されている。これは詩と勸善文及び各種佛事の疏が編輯されている。彼は僧侶道伴と儒學者及び士大夫達とも多様な交流があった。

彼の思想的な根幹は看話禪であるが、淨土念佛も重要視した。彼の淨土觀は稱名念佛を重視しながら、各疏では亡者の極樂往生も願っている。したがって他方淨土の存在も信じながら、一念念佛を勧めている。また、彼の代表的な偈頌である「念佛觀」は今日まで韓國淨土信仰に大きな影響を果し、各種儀禮の時に廣く愛誦されている。

なお、彼は稱名念佛を勧誘しながら、自性彌陀唯心淨土にも言及している。したがって、彼の兩面的な淨土觀は韓國佛教の全般的な流れである念佛禪を基盤にしているものであろう。

-
- 1) 智冠編「高城 楡岾寺 奇巖堂 法堅大師 碑文」『韓國高僧碑文總集』（伽山佛教文化研究院，2000）pp.128-129.
 - 2) 法堅著『奇巖集』（韓佛全 8, 157-184）.
 - 3) 柳夢寅『於于集』卷 4 “又博記禪教訣錄 爲空門大師 四方學者 無問儒釋 從之如輪委”.
 - 4) 李植『澤堂集』續集 卷 1 “自言住此三十餘年 足不出巖洞 又近二十年 今年八十一歲”.
 - 5) 法堅著『奇巖集』卷 3 「金剛山百川橋記」（183c）.
 - 6) 安震湖編『釋門儀範』卷上「朝誦祝文」（法輪社，1983）p.88. “極樂堂前滿月容 玉毫金色照虛空 若人一念稱名號 頃刻圓成無量功”.
 - 7) 法堅著『奇巖集』卷 2 （韓佛全 8, 167c） “倘有捺落之門 蒙彼洪施 雖無極樂之業 受厥正因”.
 - 8) 法堅著『奇巖集』卷 2 （韓佛全 8, 168a）.
 - 9) 韓普光 譯『淨土三部經』 「莊嚴念佛（2）」（如來藏，2000）p.307.
 - 10) 法堅著『奇巖集』卷 1 （韓佛全 8, 161b）.
 - 11) 法堅著『奇巖集』（韓佛全 8, 167b）.

〈キーワード〉 奇巖法堅，念佛觀，念佛禪，『奇巖集』，唯心淨土

（東國大學校教授，文博）